

人を育てる会社の社長が 今考えていること

vol. 2

低レベルの仕事ってなんだ？

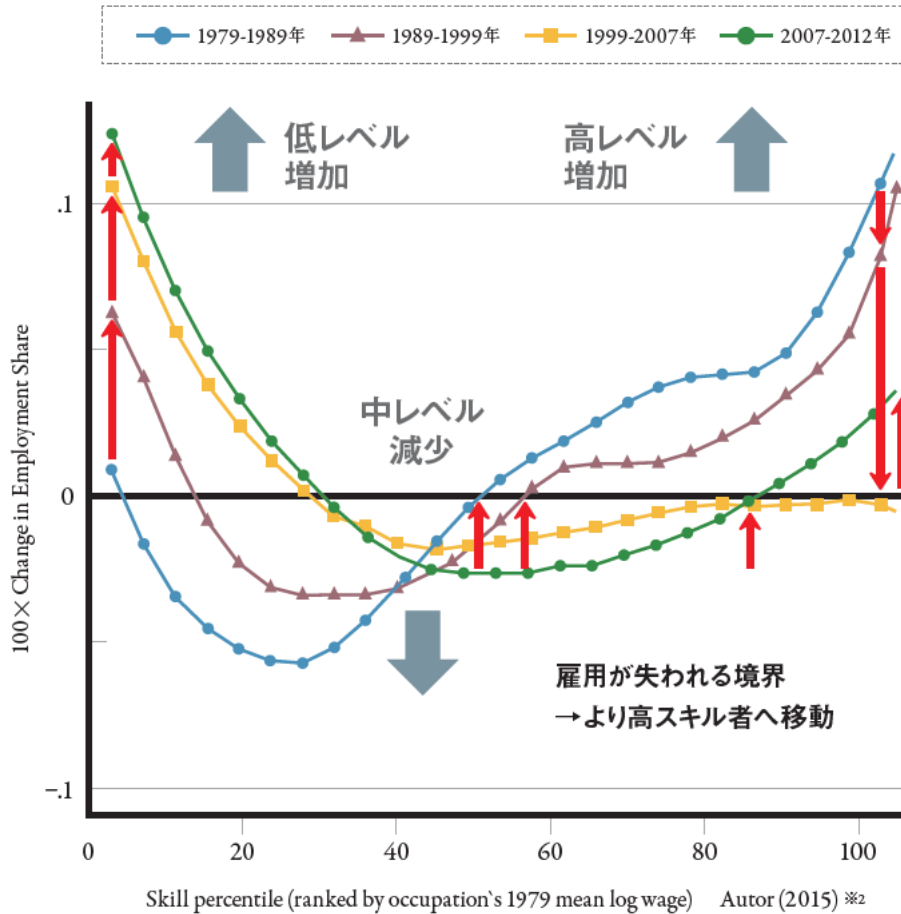
AI や RPA の活用で仕事なくなる、という話がある。今ある仕事の半数以上は何十年後にはない仕事だ、という話もある。いずれも、なんとなく人を不安にさせ、益々頑張らないといけない気にさせられたり、諦めに近い気にさせられたりする。特に仕事経験の浅い若い人が、こういった情報に気持ちを動かされやすいように思う。

そんな話が広まった発端？は、2013 年にフレイ&オズボーンが「アメリカにおいて 10～20 年以内に労働人口の 47%が機械に代替されるリスクは 70%以上」という推計結果を発表したことだ。

ただ、その後たくさんの研究者がこの結果を検証し、この推計は過大だと評価は定まった。現在の世界的コンセンサスは「機械に置き換わるのは 1 割程度」だとされる。機械化で減る仕事がある一方で、新しい産業が生まれて減った分がカバーされるので雇用の総量は大きく変わらない、のだそうだ。しかし、だから安心してね、という話では終わらない。気になるのは、雇用の構造が大きく変わっていきそうなことだ。

労働経済学という学問がある。ぼくはその世界に詳しいわけではないが、先日、日本生産性本部・岩本さんという研究員の話聞いた。その中で、労働経済学を学ぶ人の中では知らない人のいない、デビットウォーターが作成した労働力需給表の話が出た。この表は、職業をスキルの高低順に並べ、それぞれのスキル水準で雇用がどのくらい増減したか 10 年おきにプロットしたものだ（次頁参照）。

米国：スキル度別職業に見た10年ごとの雇用割合の変化



※パーソル総合研究所「別冊 HITO～労働推計 2030～」より引用

この表からわかるのは、中レベルの仕事に従事する雇用者がどんどん減っているということ。一方で、高レベルと低レベルの仕事に従事する雇用者は総じて増加している。理由は中レベルの仕事を失った雇用者がどちらかに流れているからだ。さらに言えば、低レベルの伸び幅が大きいことから、こちらに舵を切る人が多いことが見て取れる。中レベルの仕事から高レベルの仕事にステップアップすることが、現実的には難しいからだろう。

中レベルの仕事が減る背景には、AIやRPAが代用しようとする仕事、中レベルの仕事に集まることも挙げられる。低レベルの仕事は、AIやRPAで代用しても費用対効果が低いため、雇用する側の積極的投資が行われにくい。大手ファッションメーカーが製造背景を中国からアジア、さらにアフリカへと求めていく様子からもよくわかる。

つまり、テクノロジーの発展は高レベルの仕事と低レベルの仕事を増やし、中レベルの仕事をなくす方向に作用する確率が高いと言える。アメリカで起きている経済格差の原因は、この現象によるものであると経済学ではほぼ断定されているようだ。

同じ流れは、日本でも感じられる。「ベーシックインカムを導入を」というような話が出る背景も、低レベルとラベルされる仕事の雇用者が増えていることと関連性が深いのではないかとぼくは思う。低レベル雇用者は非正規雇用であることも多く、決して北歐的な福祉国家思想が根底にあるわけではない。

☆☆☆

そんな状況の中で、会社をどうマネジメントし、所属しているメンバーにどう成長機会を提供するかが、人を育てる会社の社長が今考えている課題である。間違っても「俺についてきたら大丈夫、安心しろ」的な無責任なことは言わないし、売り上げと粗利益の最大化を目指して自分だけは逃げ切ろう、とも思わない。

私が代表を勤める会社のひとつ、アソブロック株式会社は10年ほど前から兼業を必須にしている。その理由は、その方が高レベル人材にステップアップしやすいと考えたからだ。ダイヤモンドはダイヤモンドでしか磨けないように、人は人でしか磨けない。そうであれば、多様な人と出会う機会を最大化させることが、人の成長を加速させることにつながると思い舵を切った。これだけの多様化社会では、社内で人材を育成するという考え方自体が時代遅れだ。もちろん、社内での人材育成はして当然であるが、それだけで留めておいていいわけがない。

先日、大学生と話をしていたときに、周りに信頼できる大人がいない、という話になった。45歳のぼくの若かりし頃も、周りに信頼できる大人などさほどいなかったと思うが、肌感では、ぼくの時代以上にいないのだろうと感じた。

現代は「今だけ・金だけ・自分だけ」の世界だと言った人がいた。一方で、誰もそんな世界に生きたいと思っていないことも事実だと思う。高レベル人材によるテクノロジーの進化スピードは本当に早く、大半の人がそれに追いつかない。囲碁や将棋の世界がテクノロジーのフォロワーになりつつある時代、一般社会は遥か前からテクノロジーのフォロワーになっていると考えるのが妥当だ。テクノロジーの進化を志向する開発者たちは、今日も「より豊かな社会」を創造しようと日々研鑽を積んでいる。

文／だん・あそぶ

「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、業態様々な9つの会社の経営に携わる一方で、「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。立命館アジア太平洋大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開している。

団遊の組織論； <https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/>

団遊の採用論； <https://job.cinra.net/special/asoblock/>

仕事を辞めたくなくなったときに； <https://goo.gl/bFQdpC>